

坂口安吾

sakaguchi ango

現代日本のエッセイ

文学の
教祖の

少年と不良

キリスト

kōdansha
bungei bunko



きょうそ ぶんがく ふりようしやうねん
教祖の文学・不良少年とキリスト 坂口安吾エッセイ選
坂口安吾

© Tsunao Sakaguchi 1996

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

一九九六年七月一〇日第一刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽2・12・21 〒112-01

電話 編集部（03）5395・3513

販売部（03）5395・3626

製作部（03）5395・3615

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。

送料は小社負担にてお取替えます。

なお、この本の内容についてのお問い合わせは

文芸文庫出版部宛にお願いいたします。（庫文）



講談社
文芸文庫

ISBN4-06-196377-5

951円

現代日本のエッセイ

教祖の文学

不良少年とキリスト

sakaguchi angō

坂口安吾

目次

I

私の小説

教祖の文学

理想の女

思想なき眼

娯楽奉仕の心構え

思想と文学

第二芸術論について

現代とは？

新人へ

作品の仮構について

二 一七 四〇 五五 六五 七三 八五 九七

帝銀事件を論ず

七

私の葬式

八

不良少年とキリスト

九

太宰治情死考

一六

志賀直哉に文学の問題はない

二四

ヨーロッパ的性格 ニッポンの性格

二七

II

生れなかつた子供

一五

孤独と好色

一七

国宝焼亡結構論

一九

安吾風流譚

二八

“歌笑”文化

三七

チツポケな斧

二三

風流

二四

もう軍備はいらない

二六

諦めている子供たち

二八

砂をかむ（絶筆）

二九

豊島さんのこと

三〇

世に出るまで

三一

解説

川村湊 三三

年譜

若月忠信 三五

著者目録

関井光男 三八

教祖の文学・不良少年とキリスト

I

私の小説

近頃の編輯者は芸なしぞろいで、今年になってから、私に、私の小説の弁明を書けと言つてきた新聞、雑誌が、合計二十ほどあるのである。新聞雑誌の数にくらべて二十は少ない数なのか知らないが、たった一カ月という短かい期間に、東西南北、別々の編輯室の窓の下で智慧をしぼったあげくに、二十人の編輯者が同じ原稿をたのみにくるとは、無芸大食、大食は否応なしに封じられているかも知れぬが、流線型という感じではない。

私は世間知らずで、書齋と一軒の居酒屋の外は知らないのだから、私はその時まで、私が情痴作家と呼ばれていることなど、知らなかった。呆れたことには、女坂口安吾とよばれている女流情痴作家がいるというフザケた話だから、私も遂にギョツとして、女舟橋は誰ですか、ときいたら、その編輯者は訝しげに目をまるくして、そんなのはいません、という。私は、また、ギョツとした。

先着順に二つだけ書くことにして、二つ目がこの原稿なのだが、書きたくないからと断つても、暫くたつと、忘れたふりをしてやってきて、悠々たるもの、さすがに堂々たる武

者ぶり、新大阪は人材がいますよ。

私は生れつきツキアイの良い性分なので、先方が情痴作家ときめこんで来てくれているのに、いやそうじゃない、私はプラトンの流れをくむアテナイの市民です、などというアコギな扱いはできないたちなのだ。

正直なところ、私は人の評判を全然気にかけていない。情痴作家、エロ作家、なんとも言うがいいのである。読む方の勝手だ。こう読め、ああ読めと、一々指図さしずのできるものではないのだ。

文学というものはそういうもので、読む人によって、どういう解釈もできる。私の小説が情痴小説だと思ふのは先方の勝手だけれど、然ししか、これだけは知らねばならぬ。つまり一つの小説に無数の解釈が成立つのだから、一つの解釈だけが真実ではないということだ。私が情痴作家だという。ところが、案外、そう読んだ読者の方が情痴読者かも知れぬ。読者は私を情痴作者だというし、私は読者を情痴読者だという。別に法廷へ持ちだすまでのことはない。裁判官はちゃんという。歴史だ。我々はつまらぬことをいう必要はない。証拠書類は全部出しているのだから。曰くいわ、小説。作家にとって小説は全てであり、全てを語りつくしており、それに補足して弁明すべき何物も有る筈はずはない。有り得ない。文学は全てのものだ。

私はてんで弁明など書く気持を持たないのである。すると編輯者は、弁明など書いてく

れなくともよい。私の小説、ということで一席やれという。

私の小説、それはムリだな。私の小説は、小説が全部なのだから、私の小説は、私の小説だけでたくさん。私はたしかに情痴作家だ。なぜなら情痴を書いてゐるから。情痴のために情痴を書いていないなどと、私は今、ここで何をいう必要もないのだ。全ては私の小説自体が物語っている。小説は偽ることのできないものだ。

私はそういう一部の読者に忠言をこころみたい。有害無益な小説は読むなかれ、ということである。有害無益を知りつつ読むなら読者の教養、人格はゼロだ。

小説というものは、全く異質の二つがある。一つは読み物で、一つは文学である。この二つがどういうふうに違っているかは読者自らが学問すべきことであつて、文学とは何か、文学を理解するには、いくらか教養が必要だと知らなければならぬ。

然し教養というものは、決して書物を読むだけが能ではない。同じ考える生活でも、考える根柢の在り方によつては、むしろ考えることによつて考えない人よりも愚劣な知識があるものだ。知識は偽ることの多いものである。

ただ生き方の問題だ。教養というものは、生き方の誠実さが根柢である。

だいたい日本の道徳は、昔から不義はお家の法度などといつて、恋愛は罪惡だといわれ
ていた。昔ばかりではない。今でも自由結婚という。特に自由結婚というのだ。つまり恋愛
愛のことだ。

なぜ自由がかくも軽蔑されたか、自由を軽蔑し、不自由な鑄型いがたの中に人間を縛しばろうとする古いモラルが間違っているばかりでなく、自由自体に古いモラルを眞実訂正する実力がなかったのだらう。

幕末に、オランダ語の自由という語が初めて翻訳ほんやくの必要にせまられた時、当時の蘭学者は訳語に窮きゆうしたばかりでなく、自由とは何か、その意味からが判わからなかつた。そして「わがまま」と訳したという。實際当時の思想では、自ら欲みづかし自ら行なう眞実自由なる生活自体がなかつたので、自由とはわがまま以上に理解しなかつたのは当然だ。然しこれを昔の笑い話と思うのは軽率で、今日日本人の自由というとき、尚なほ多くの人は五十歩百歩、わがままと履はきちがえている場合が多い。自由とは責任がそれに伴なわねばならぬ、ということ、これは今日屢々しばしば言われることであるが、こういうふうに一言にして言うことは易いが、眞に自由の中に責任を自覚するには、深い教養を必要とするものである。

自由は地獄の門をくぐる。不安、懊惱おうのう、悲痛、慟哭どうこくに立たされているものである。すべて自らの責任に於てなされるものだからである。人が眞実大いなる限定を、大いなる不自由を見出すのも、自由の中に於てである。自由は必ず地獄の中をさまよい、遂に天国へ到り得ぬ悲しい魂に充たされている。

昔から自由と自由人は絶えたことがない。文学がそうだ。宗教も哲学もそうであつた。封建思想は旧式だと、一言で片附けるのは間違いで、自由に対する絶望が、凡夫ぼんぷの秩序を

自ら不自由に限定せしめるように作用した歴史の長い足跡があったのだ。そしてかかる日本の封建思想を完成せしめた孔子は実に自由人であり、永遠の現代人であり、而して彼の現身は保守家ではなく、反逆者であった。彼は自由を闘った反逆者だ。

キリストもまたそうである。彼は反逆者であった。ハリツケにかけられた罪人だった。そして最も偉大なる自由人であり、永遠の現代人であった。

真実の自由、自由人は常に反逆人たらざるを得ないものである。今日、キリストを、孔子を、この現世へ再生せしめて、その幼少から生長の道を歩ませたなら、彼らは神ならず、聖人ならず、反逆者であり、罪人であり、世を拗ねた一人よがりの馬鹿者、気違いであるであらう。

自由人の宿命は、彼等ほど偉大ではあり得なくとも、多かれ少かれ、似た道を辿らざるを得ないものだ。なぜなら、自由は常に天国を目差しながら、地獄の門をくぐり、地獄をさまようものだからである。

文学が、そういうものの一つなのだ。自由人の哀れみじめの爪の跡、地獄の遍歴の血の爪の跡、悲しい反逆の足跡だ。

お前の文学は何か？ お前は誰？ と聞かれたら、私は、いささか、はにかみながら、然し、少し威張って、こう答える。私はまアできそこないの、その上本物よりも大いにエロな、子路だ、と。つまり猪八戒と子路の合いの子なので、猪八戒の勢力範囲が旺盛だから